



追播をうまく使って放牧地をリフレッシュ

草地更新は補助事業の減少により、ますます減少傾向にあります。特に放牧地の更新はどうしても後回しになりがちです。しかし、天北地域では放牧に適し、播種後の定着が速やかなペレニアルライグラス（PR）を追播により導入し、放牧地の生産量を上げることができます。

ここでは、老朽化したオーチャードグラス（OG）草地に作溝式追播機を用いて、PRを導入する効果を紹介します。

施工は5月上旬の早春と7月上旬の夏に行いました。施工前の植生は表1に示しました。施工後の入牧時期についても、施工5日後と15日後で比較検討しましたが、特に違いは見られませんでしたので、施工後の入牧時期は特に気にする必要はなく、通常の放牧ローテーションで問題ありません。

播種量は2.5kg/10aで、施肥は放牧地の維持段階と同様の10a当たりN:3kg、P₂O₅:8kg、K₂O:8kgです。また、放牧は施工後、入牧時草丈20cm、退牧時草丈7cmを目安に行いました。

表1 施工時の冠部被度 (%)

OG	シロクローバ	イネ科雑草	広葉雑草	裸地
60	5	10	10	15

施工年は作溝機による追播の場合は、草地表面に占める施工部分が少ないため、通常の放牧利用が可能です。追播したPRは秋に目に付くようになる程度です。

施工2年目の乾物収量を表2に、生草中のPRの割合を表3に示しました。

表2 5月および7月施工区の2年目乾物収量 (kg/10a)

	放牧回次								合計
	1	2	3	4	5	6	7	8	
5月 作溝	97	68	64	77	39	47	58	60	509
月 無処理	106	52	48	37	57	52	35		388
7月 作溝	70	52	73	50	39	59	68	44	456
月 無処理	80	57	86	46	60	71	44		444

5月施工区は明らかに乾物収量が増加し、放牧回数を増やすことができました。7月施工区は収量の増加程度は5月施工に比べ、少なくなっています。

表3 放牧回次毎の生草中PR割合 (%)

	放牧回次							
	1	2	3	4	5	6	7	8
5月 作溝	21	20	20	27	42	14	40	40
月 無処理	0	0	0	0	0	2	0	
7月 作溝	1	2	2	5	9	15	16	22
月 無処理	0	4	4	5	0	0	3	

生草中のPR割合を見ると、夏以降に上昇しており、表2で見られた乾物収量の増加はPR導入の効果と推測されます。7月施工区で収量の増加程度が少なかった要因は、PRの割合が5月施工区より少ないことによるものと思われます。

また、夏の施工については早春の施工よりPR割合が少ないことから、8月施工についても検討しましたが、7月施工と同様の結果でした。

さらに5月施工区と7月施工区については3年目も同様の調査を行いました。年間の平均の草種割合を表4に示しました。

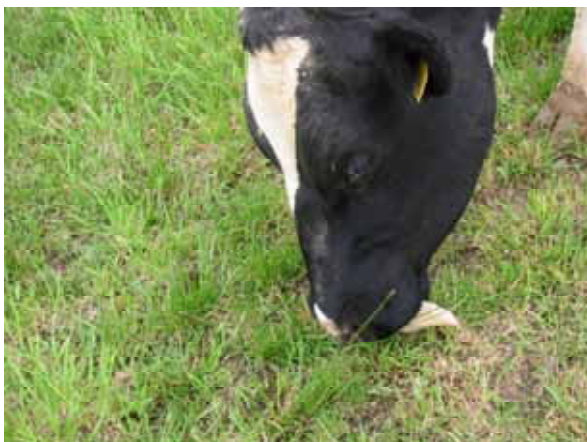
表4 3年目の放牧回次平均草種割合

施工機	PR	OG	シロ イネ科		広葉 雑草
			クローバ	雑草	
5 月 作溝	36	33	6	24	1
5 月 無処理	0	49	16	34	1
7 月 作溝	33	29	10	26	2
7 月 無処理	0	60	9	29	2

3年目のPR割合の平均を見ると、7月施工区も5月施工区と同じ程度になっています。つまり、7月施工区でも、1年遅れるがほぼ同様の効果が3年目には得られました。

まとめ

1. 作溝式追播機を用いることにより、OG主体放牧地を利用しながら、PRを導入し、生産量を向上させることができます。
2. 施工時期は春（5月）の方が翌年のPR割合が高い。しかし、夏（7・8月）でも経年的に増加し、3年目には同様の効果が得られます。
3. 施工後は集約的に利用した方が、既存植生を抑制、播種牧草の定着を促進します。



ペレニアルライグラスを好んで食べている乳牛

作溝式追播機

